新しい筋弛緩モニタリング
TOF−cuff™の有用性は？

演者　日本大学医学部
麻酔科学系麻酔科学分野　主任教授
鈴木 孝浩 先生

筋弛緩薬への感受性は個々で大きく異なる上に、患者特性や麻酔薬の種類などにより容易に効果が影響される。よって筋弛緩薬を画一的に定時投与したり、血中濃度予測のみに頼ったりするのではなく、実際の筋弛緩効果を監視し、個々の症例や手術に応じた筋弛緩を提供することが望ましい。

臨床麻酔で薬力学的モニタリングを汎用するには、易操作性、簡便性という特徴は不可欠であり、その上で当然、正確性が求められるであろう。それ故、それら機能を備え、比較的安価な加速度マイオグラムが使用されてきた。

歴史的には筋張力や筋電図モニタを経緯してきたが、これまでとは機序を全く異にする新しい筋弛緩モニタ TOF-cuff™ が使用可能となった。

本モニタは血圧マンシェットと同じ形をしたカフセンサを巻くだけで、血圧測定はもとより、継続的な神経刺激と筋弛緩状態測定が可能であり、麻酔導入直後からモニタリングを応用できる点で有用である。

また筋弛緩の維持や回復時、筋弛緩深度に適した神経刺激パターンを自動的に選択、解析する AUTO モードを搭載している点でも評価されよう。

TOF ウォッチ™ と比較しながら、TOF-cuff™ の有用性を探ってみたい。